



トウスク・ポーランド首相 訪日記念レセプションに参加



訪日記念レセプションでスピーチをする
ドナルド・トウスク・ポーランド首相



民間外交推進協会（FEC）の松澤建理
理事長は4月14日、ポーランド共和国大使館
で開催されたドナルド・トウスク・ポーラ
ンド共和国首相訪日記念レセプションへ出席した。

トウスク首相は「ポーランドと日本の二国間関係につ
いて、私個人としても日本人は信頼できる国民であり、困難
な時期に支えてくれた大切な友人であると認識している。
両国の揺るぎない関係を改めて確認できたことを大変嬉し
く思う」と述べた。その上で、「今回の訪日は、両国が共
通の価値観に基づく強固な友好関係で結ばれていることを
再確認するとともに、経済関係をさらに発展させることを
目的としている。明日、高市早苗首相と会談し、二国間関
係を「包括的・戦略的パートナーシップ」のレベルへ引き
上げる予定であり、非常に楽しみにしている。より一層強

固な関係を築いていきたい」と、今後の関係強化への意欲
を示した。



ポーランド大使館員らと松澤理事長

Celebration



【3月24日】
ギリシャ建国記念日レセ
プションにてオルガ・ク
リアマキ駐日大使（右）
と小方俊也FEC専務理
事



【3月26日】
バングラデシュ独立55周年お
よび建国記念日レセプション
にてムハンマド・ダウド・ア
リ駐日大使夫妻（右）と松沢
聡FEC常務理事



【3月30日】
インド大使館でのお花見
レセプションにてナグマ
・モハメド・マリック駐
日大使（右）と松澤理事
長



【4月12日】
ラオス正月（ピーマイ・
ラオ）祝賀パチ儀式レセ
プションにてアンパイ・
キンダヴォン駐日大使
（右）と松沢常務理事

ベラルーシ臨時代理大使と面会

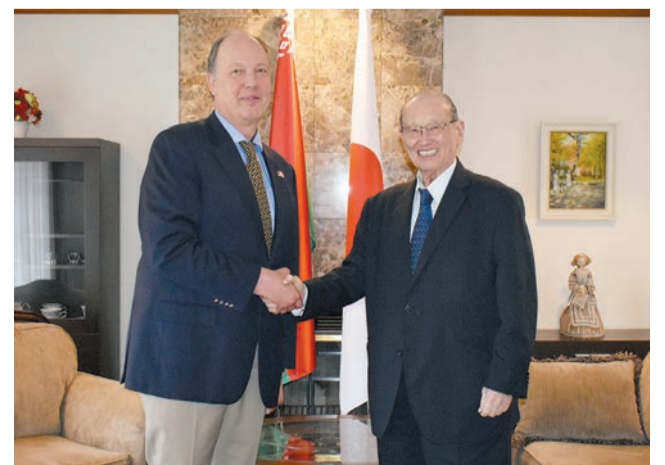


松澤理事長は3月31日、ラザレフ
・エヴゲーニイ駐日ベラルーシ共和
国臨時代理大使と面会した一写真。

臨時代理大使は「FECは非常に活発に活動して
いる団体であると前任から聞いており、本日のような
機会を大変嬉しく思う。ロシア・ウクライナ情勢
については、日本と同様に早期終結を望んでいる」
と述べ、対話継続の重要性を強調した。また、「日
・ベラルーシ間の貿易は拡大傾向にあり、日本から

の輸出も増加している。日本企業にとっての市場と
しての可能性もあり、来年の外交関係樹立45周年に
向けてFECとのフォーラム開催を期待している」
と今後の展望を語った。

これに対し松澤理事長は、「本日はベラルーシの
現状や今後の可能性について大変有意義なお話を伺
うことができた。今後、ビジネスフォーラムや文化
フォーラムを開催し、会員に向けてもお話したいだ
きたい」と述べた。



第22次FECアセアン訪問団



異なる環境の国 3点比較の機会に



在シンガポール日本国大使館にて堀田享次席公使（前列中央）を囲んで



在フィリピン日本国大使館にて横田直文公使（中央）を囲んで



団長所感

本橋弘治

FEC日アセアン文化経済委員会委員長
味の素(株)シニアアドバイザー

7年ぶりの再開となる第22次は訪問先をシンガポール、フィリピンとして2026年3月8日から14日の日程で行った。メンバーは渡部賢一FEC会長を顧問に、医療、化学、機械、金融、観光、リサイクル、トレーディング、コンサルティングと幅広い業種からの参加となった。

AI・フィンテックなどテクノロジーが集積するシンガポールでは最先端のプラクティスを実地で見学した。シンガポール国立大学では起業家教育やスタートアップ支援事業を推進するNUS ENTERPRISEの大場優氏より成長分野に人財を輩出していく機能的なエコシステムの構築、大学や研究機関に眠る優れた知的財産を民間企業とのコラボレーションを通じてマネタイズしていく機会の発掘など、官学が連携して実践的な戦略が推進されていることを伺った。

貿易産業省が統括する科学技術研究庁(A*STAR)では、二反田篤史先生からニューラルネットワークを用いた機械学習の登場でAI技術が目覚ましい発展を遂げており、産業界にも非連続なイノベーションをもたらす可能性を示唆頂いた。同時に海上・航空物流のハブとしての競争力強化のために物理的な集中投資が行われている裏で、最先端のAI技術による圧倒的な効率化・低コスト化が国策として推進されていると伺った。

シンガポール・マレーシアを拠点にア

ジアで展開する世界的な私立総合病院ネットワークのグレンイーグルス病院(Gleneagles Hospital Singapore)では佐藤健一医師の案内のもと、専門医療とデジタル技術の融合、省人化してもなお高品質で衛生管理の行き届いた看護により富裕層の取り込みに成功する現場を視察した。加えて在シンガポール日本国大使館の堀田享公使、JETROシンガポールの黒川淳二所長、TMI総合法律事務所シンガポールオフィスの高橋俊介弁護士からはシンガポールの経済動向や投資環境について現場感にあふれる情報を頂いた。

いずれの訪問先でも資源の乏しい小国であるシンガポールがスマートな集中と選択により世界中から投資と人材を呼び込み、経営資源のハブとしての魅力を最大限に活かしテクノロジー集積とイノベーション実現の好循環を官民学のしたたかな連携で進めていることに感銘した。

次の訪問国、フィリピンはかつて「アジアの病人」と言われるほど、長い経済停滞を経験したが、10年以降はASEANでもトップクラスの経済成長を遂げた。私は05年から09年までの4年間、販売マーケティングの責任者としてフィリピンに駐在経験があるため、今回の訪問はまさにBefore Afterを実感する機会となった。

BDO Unibankで片川弘一氏、下田裕

深氏からフィリピンの投資環境や財界、ジャパンデスクについての情報を頂いた後、訪問団メンバーの関心が高かった行政各省庁に赴いた。保健省 国際保健協力局のダイレクター-JOEL H BUENA VENTURA氏からはフィリピンの国民健康保険の現状や医療機関の概要を伺う。医療関係者が多いこともあり団員から多くの質問があったが、日本への留学経験もある同氏からは、すべての国民が一定の医療サービスを受けられる仕組みと体制を推進していること、日本企業が医療の分野で進出・事業展開することのニーズも高いことなど、丁寧な説明を頂いた。

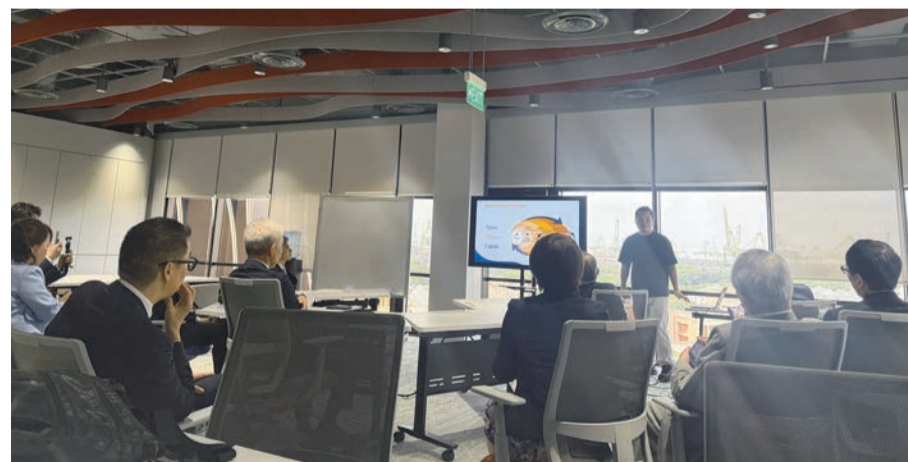
外務省のヘレーラ・リム次官、経済企画開発省のカプーノ次官、貿易産業省のセフェリノ・ロドルフォ次官への訪問では団員各社の日本での事業概要や投資先としてのフィリピンへの期待や関心が紹介され、具体的かつ実践的な助言や今後のサポートの窓口を紹介頂くことができた。また、在フィリピン日本国大使館の横田直文公使、JETROマニラ事務所の

葛原伯史アドバイザーからはフィリピンの概況についての確かなブリーフィングを頂いた。

海外出稼ぎ労働者OFWの送金がGDPの7割以上を占める旺盛な個人消費を支えており、年齢中央値25歳、50年まで人口ボーナス期が続くという同国のポテンシャルの高さを感じる一方、貧富と格差、インフレ、足下では経済成長にも響りが見え始めたという環境の中で、未来を信じて生きる国民のたくましさ、明るさが印象に残る訪問となった。

今回の訪問はあえてシンガポールとフィリピンという全く異なる環境の国を選択したことで、26年現在の日本と両国の3点比較の機会を得た。また全日程を通じて団員相互の意見交換などから互いに学び合い刺激を受ける絶好の場を頂いた。

最後になるが、ご多忙の中、快く我々のミッションを受け入れて頂いた両国政府・各機関の皆様、本邦外務省・在外公館の皆様、JETRO、TMI総合法律事務所、BDO Unibankの皆様にご心から御礼を申し上げます。



シンガポール国立大学



シンガポール科学技術研究庁(A*STAR)



JETROシンガポール事務所

日本の立ち位置 考える契機に



訪問団詳細

渡部賢一

FEC会長
TMI総合法律事務所顧問

コロナ禍を経て再開された海外訪問団も2回目となり、今回はシンガポールおよびフィリピンを訪問した。発展段階も社会構造も大きく異なる二国をあえて組み合わせることで、現在のアセアンの広がりや厚みを実感する機会となった。

シンガポールは、資源に乏しい小国でありながら、世界中から資本と人材を呼び込み、テクノロジーと金融のハブとしての地位を確立している。その背景には、官民学が一体となった戦略と、徹底した選択と集中がある。大学における起

業支援や研究成果の事業化、AIをはじめとする先端分野への投資など、いずれも実践的であり、成果に直結する仕組みが整っている。限られた条件の中で最大の成果を引き出す、その設計力と実行力は、日本が改めて学ぶべき点が多い。また、人口は600万人強であり、外国籍比率が4割に達するなど多民族社会としての特徴を持ちながら、先進国として少子高齢化への対応と社会の安定とのバランスに配慮している点も印象的であった。

一方のフィリピンは、人口の若さと旺

盛な内需に支えられ、成長の途上にある国である。同国は人口が1億2000万人に迫り、平均年齢も25歳前後と非常に若く、いわゆる人口ボーナス期にある。長期にわたる経済的停滞を乗り越え、現在はアセアンの中でも高い成長率を維持しているが、その裏側には格差やインフレといった課題も存在する。そうした環境の中でも、現地の人々の明るさと前向きさは印象的であり、将来に対する期待を感じさせるものであった。政府関係者との面会を通じて、日本企業への関心の高さと具体的な連携の可能性を確認できたことも収穫である。対照をなす二国を同時に見ることで、日本の立ち位置を改めて考える契機ともなった。

なお、余談となるが、ミシュラン星付きレストランの数にも両国の違いが表れている。シンガポールは近年40軒程度と依然として高い水準を維持しているもの

の、数年前の50台からはやや減少傾向にある。一方でフィリピンは昨年秋より評価が開始され、すでに9軒が選出されている。食文化の成熟度と今後の伸びしろを象徴する一例として興味深い。

今回の訪問にあたり、外務省の南東アジア第二課やシンガポールおよびフィリピンの在外公館の方々には多大なご尽力を賜った。また、本橋団長は多様な業種からの参加者の意向を踏まえつつ、極めて実務的かつ密度の高い行程を組み立てられた。各訪問先においても活発な意見交換が行われ、団員相互の学びの機会にもなっていたことは特筆すべきである。この場を借りて、そのご尽力に謝意を表したい。

当協会としては本年7月にモンゴルへの派遣を予定している。さらに今後も継続的な派遣を企図しており、会員各位のお役に立てるよう努めていく所存である。



Gleneagles Hospital Singapore



Gleneagles Hospital Singapore



TMI総合法律事務所シンガポール
オフィス

【日程】

- 3月8日 午前＝羽田空港集合、日本航空便でシンガポールへ
- 9日 午前＝シンガポール国立大学にて大場優NUS Enterprise Japan Country Directorによるブリーフィング
午後＝在シンガポール日本国大使館にて堀田享次席公使によるブリーフィングと昼食会
JETROシンガポール事務所にて黒川淳二所長によるブリーフィング
- 10日 午前＝科学技術研究庁（A*STAR）にて二反田篤史先生によるブリーフィング
午後＝Gleneagles Hospital Singaporeにて佐藤健一医師・グイロン・ヤンCOOによるブリーフィング、院内視察
TMI総合法律事務所シンガポールオフィスにて高橋俊介パートナーによるブリーフィング
- 11日 午後＝シンガポール航空便にてマニラへ
- 12日 午前＝BDO Unibank, Inc.にて片川弘一ジャパンデスクヘッドによるブリーフィング
保健省（DOH）ジョエル・H・プエナイベントゥーラ局長代理との面会
午後＝外務省（DFA）のヘレーラ・リム次官との面会
JETROマニラ事務所にて葛原伯史アドバイザーによるブリーフィング
経済企画開発省（DEPDev）のジョセフ・J・カブーノ次官との面会兼夕食会
ミンダナオ省自治政府機関との面会兼夕食会
- 13日 午前＝在フィリピン日本国大使館にて横田直文公使よりブリーフィング
午後＝貿易産業省（DTI）にてセフェリノ・ロドルフォ次官との面会
日本航空便にて羽田空港へ
- 14日 午前＝羽田空港着、解散



フィリピンBDO UniBank

【訪問団メンバー】

- ◇ 団長＝本橋弘治FEC日アセアン文化経済委員会委員長（味の素(株)シニアアドバイザー）
- ◇ 顧問＝渡部賢一FEC会長（TMI総合法律事務所顧問、元野村ホールディングス(株)取締役代表執行役社長グループCEO）
- ◇ 団員＝荒井嘉久Tokushima Auction Market(株)代表取締役
飯沼秀一(株)Joblab代表取締役
岡野健一郎TOAGOSEI SINGAPORE PTE. LTD. 社長
押野一郎(株)テクノロジーOne代表取締役
高須英津子医療法人社団福祉会高須クリニック銀座院院長
二宮恒一(株)日栄サービス代表取締役社長
袴田浩二医療法人社団福祉会高須クリニック銀座院マーケティング部部长
長谷川フジ子サクラグローバルホールディング(株)執行役員パブリックリレーションズ室長
間嶋恒吾サクラ精機(株)国際事業本部取締役営業本部長
松本謙一サクラグローバルホールディング(株)代表取締役会長
山下健(株)小樽グリーンホテル代表取締役

◇ 随員 1名

◇ 添乗員 1名

(五十音順・敬称略)



フィリピン保健省



フィリピン外務省



JETROマニラ事務所



フィリピン貿易産業省



フィリピン経済企画開発省

第22次アセアン訪問団
報告会・解団式のご案内

日時：5月29日(金)16時～18時

会場：如水会館

※詳細は事務局までお問い合わせ
ください。

第303回 国際研究会 「ケニア文化フォーラム」

サービス業が半分、茶葉輸出量は世界1位



FECは3月16日、第303回国際研究会(ケニア文化フォーラム)をケニア共和国大使館にて開催した。松澤建FEC理事長の開会挨拶の後、モイ・レモシラ駐日ケニア大使が挨拶を述べ、アーサー・アンダンピ次席大使がプレゼンテーションを行った。質疑応答の後はネットワーキングで交流した。

【大使挨拶】

本日はFECの皆様をお迎えでき、大変光栄に思う。ケニアと日本の外交関係は約60年にわたり極めて良好な関係を築いてきた。日本に駐在して1年半となるが、この間にも両国関係は一層強固になっていると実感している。今日の機会がケニアに進出している125社の日本企業にとっても学びの時間になることを願っている。

【次席大使プレゼンテーション】

ケニアは東アフリカに位置し、首都はナイロビ、人口約5600万人で、1963年12月12日にイギリスから独立した。40以上の民族が共存し、それぞれ固有の言語を持つが、ケニア国語はスワヒリ語、公用語は英語とスワヒリ語である。日本との時差は6時間で、通貨はケニア・シリングである。

国旗の色には大切な意味があり、黒は「ケニアの人々」、白は「平和」、赤は「独立戦争時に流した血」、緑は「ケニアの大地」を表す。中央の盾と槍は「国



を守るシンボル」である。

地形は多様であり、西側は大陸を縦断する大地溝帯、北部は乾燥した砂漠地帯、中央にはアフリカ第2の高峰のケニア山がある。インド洋に面した沿岸部には白砂のビーチリゾートが広がり、南部には野生動物が生息するサバンナが広がる。南西部にはビクトリア湖がある。

民族構成はナイル系、クシャ系、バントゥー系の系統に大別される。民族衣装は色豊かな布が特徴であり、テーラメイドが多い。マサイ族の女性は手作りのビーズ・アクセサリーを身につけ、男性はマサイシュカという衣装をつける。カンガ/レソという布は風呂敷のようなもので、乳児を抱く用途や日常生活用品としても活用される。

食文化は肉を焼くバーベキュー形式が一般的であり、主食はトウモロコシ粉を練った「ウガリ」で、日本の米に相当する。また紅茶文化が根付いており、日常的にチャイが飲まれている。



著名人は、アフリカの女性では初のノーベル賞受賞者(平和賞)である環境活動家ワンガリ・マータイ氏やマラソンの元世界記録保持者のエリウド・キプチョゲ氏などがいる。

スワヒリ語はアフリカ東海岸が起源のバントゥー系言語であり、語彙の約35%がアラビア語に由来する。東アフリカから中央アフリカにかけて約2億人以上に話されている。日本国内でも一部の大学で学習可能である。日本語とスワヒリ語は母音中心の発音体系を持つ点で共通性があり、同じように発音する単語がたくさんある。

経済活動に関して、GDP産業別割合ではサービス業が約50%と半分を占め、農業は約23%、製造業が約17%と続く。サービス業の宿泊業、金融サービス、交通関連産業などが経済を牽引している。農業ではコーヒー豆や茶葉の輸出が盛んであり、茶葉は生産量世界2位、輸出量は世界1位を誇る。切り花も日本向けに多く輸出されている。製造業にはビール

などの加工業、自動車等の組立製造、セメント製造などが挙げられる。

両国間では政府開発援助(ODA)プロジェクトが進展している。ケニアは国内エネルギーの約90%が再生可能エネルギーという特徴がある。また、自動車市場では日本車が約80%を占める。スポーツでは長距離が強く、2025年の世界陸上でも金メダリストが多く出ている。

観光は重要な産業の一つであり、「ビッグファイブ」と呼ばれる大型野生動物を目的とした観光が盛んである。車でのサファリ・ツアーが一般的であるが、徒歩や自転車、さらには熱気球でも可能である。特にヌーの大移動は世界的に著名な自然現象である。ケニア山国立公園では高山植物を観察しながらピクニックもできる。ラム旧市街は世界遺産に登録されており、島内では主にロバで移動する。野生動物に遭遇することもあるサファリマラソンやゴルフサファリもあり、近年はスポーツを目的とした観光も人気が高い。

ONE SAKURA
つなぐ力が医療をさらに強くする

<皆様のウィルスから守る!> <がんの迅速診断に!>

サクラ精機株式会社 <https://www.sakurajp.com> サクラファインテックジャパン株式会社 <https://www.sakura-finetek.com>

サクラグローバルホールディング株式会社 <https://www.sakuraghc.com> TEL:03-3270-1666

ホームセキュリティは **ALSOK**

Always Security OK 新潟総合警備保障株式会社 <https://www.ngtalsok.co.jp/>

0120-39-2413 (年中無休 24時間受付)

「ポルトガル・フォーラム」

歴史的出会いを経て 幅広い分野で協力続く



FECは3月18日、第155回欧州研究会（ポルトガル・フォーラム）をポルトガル大使館にて開催した。松澤建FEC理事長の開会挨拶の後、ジルベルト・ジェロニム駐日ポルトガル大使が講演し、続いてポルトガル観光のプレゼンテーションも行われた。最後にネットワークの時間が設けられ、大使館が用意したポルトガル料理やワインを味わいながら交流が行われた。

【大使講演】

ポルトガルと日本は、それぞれ独自の文化とアイデンティティを持つ国であり、人々も異なる歴史や価値観の中で生きてきた。この両国の関係を理解するうえで重要なのは、単なる外交関係ではなく、「遠く離れた2つの文明の出会い」であったという点である。1543年は、ヨーロッパの国が初めて日本に到達した年であり、ここに両国関係の出発点がある。ポルトガルは国土こそ小さいが、歴史的に世界に大きな影響を与えてきた。ユーラシア大陸最西端のロカ岬を持つこの国は西の果てに位置し、日本は極東の東の果てにある。この対照的な位置関係は、両国の出会いの象徴といえる。

ポルトガルはサッカー大国として知られ、クリスティアーノ・ロナウドのような世界的選手を輩出している。また、エッグタルト（パステル・デ・ナタ）に代表される食文化や、日本の演

第155回 欧州研究会

駐日ポルトガル大使
ジルベルト・ジェロニム

歌にも通じる哀愁を帯びた音楽ファドも親しまれている。さらにポルトガルワインは高い評価を受け、コーヒー文化も注目されている。国際社会では、国連事務総長アントニオ・グテーレスを輩出するなど、政治面でも存在感を示している。

ポルトガルの特徴は、広がりのある外交・文化ネットワークにある。大西洋圏や欧州、アフリカや南米との歴史的つながりを背景に、世界各地に人のネットワークを築いてきた。また、多国間主義を重視する姿勢は日本とも共通しており、両国を結びつけている。

大航海時代、ポルトガル人はアフリカ沿岸を南下し、インド、中国を経て日本に至る航路を開拓した。GPSや航空機のない時代に帆船だけで成し遂げた航海は、人類史上屈指の挑戦であった。こうして1543年、ポルトガル人が種子島に到来し、日本との交流が始まる。この出会いは約1世紀にわたる



交流へ発展し、ポルトガルは交易の拡大とともに火縄銃などの技術や知識をもたらした。さらに宗教や学問の分野でも交流が進み、日本社会に大きな影響を与えた。その影響は今も身近に見られる。カステラや金平糖、天ぷらはポルトガル由来とされ、言葉の面でもポルトガル語由来の語が日本語に残っている。これは当時の交流の深さを示している。

しかし、この関係は1639年の鎖国によって一度途絶える。その後、19世紀半ばに日本が開国すると、ポルトガルは比較的早く通商関係を再開した。背景には過去の信頼関係があったと考えられる。なお、マカオは長く交流の拠点として重要な役割を果たした。近代以降、特に1974年のカーネーション革命による民主化を契機に、日本との関係はさらに深まった。政治・経済・文化の各分野で交流が広がり、近年では首脳の往来を通じて戦略的パートナーシップへと発展している。

現在、ポルトガルは大学間連携やポルトガル語教育の普及に力を入れている。日本でも複数の大学でポルトガル語が学ばれ、ポルトガルでは日本語学習者が増加している。経済面でも関係は深まり、過去10年でポルトガルから日本への輸出は倍増した。ワインなどの食品やカトラリー製品が日本市場で存在感を高めている。さらに、近年の象徴的な出来事として大阪・関西万博への参加が挙げられる。ポルトガル館は隈研吾氏によって設計され、海とのつながりをテーマにしたデザインが高く評価された。

このように、ポルトガルと日本の関係は歴史的出会いから始まり、途絶を経て再び結びつき、現在では幅広い分野で協力関係を築いている。今後も科学技術や文化、経済、再生可能エネルギーなどの分野で連携がさらに深まり、その関係を一層強固にしていけることが期待される。

「エジプト・ビジネスフォーラム」

スタートアップ参入、医療分野で協力の可能性

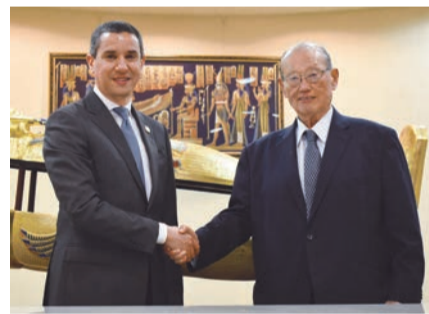


FECは4月3日、第99回中東研究会（エジプト・ビジネスフォーラム）をエジプト大使公邸にて開催した。最初にラギィ・エルエトレビ駐日エジプト大使が日本とエジプトの関係などを含めたスピーチと挨拶を行い、続いて松澤理事長が主催者を代表し、「本日はエルエトレビ駐日エジプト大使を迎え、ビジネスフォーラムを開催できることを大変光栄に思う。エジプトは5000年前にさかのぼる文明を有し、その知恵は世界に知識と幸福をもたらしてきた。日本にとって中東・アフリカ地域の重要なパートナーでもあり、近年はインフラや再生可能エネルギーなど多分野で発展し、国際的なビジネス拠点として存在感を高めている。本フォーラムが両国のさらなる発展につながる契機となることを期待している」と挨拶した。その後は参加者がそれぞれ自己紹介を行い、大使公邸で用意いただいたエジプト料理を堪能した。その間、サーメ・エルキシン次席、オサマ・エルサイド参事官、およびエナス・タハ二等書記官らが「EGYPT: Unlocking New Potential」をテーマにエジプトの概要や投資に関するプレゼンテーションを行い、参加者らは質疑応答を通して、エジプトでのビジネスの理解を深める機会となった。

【大使挨拶】

本日はエジプト大使公邸に来て頂き、大変嬉しく思う。FECの会員懇親会では松澤理事長に温かく迎えて頂いたこともよく覚えている。日本とエ

第99回 中東研究会

駐日エジプト大使
ラギィ・エルエトレビ

ジプトにはさまざまな類似点があり、駐日大使として両国の関係が一層緊密となるよう、優秀なチームに支えられて日々その使命に取り組んでいる。日本とエジプトは3年前に戦略的パートナーシップを正式に表明しているが、この関係は実質的にはそれ以前から長年にわたり築かれてきたものであり、1862年に侍使節団がエジプトを訪問したことに象徴されるように、両国の交流は歴史的にも深いものである。大使館入口に展示されている侍の写真は、その象徴的な例である。

戦略的パートナーシップにおいて、投資は極めて重要な柱であり最優先事項の一つである。岩井文男駐エジプト日本大使と連携し、日本からの投資誘致を強化している。現在エジプトでは、社会経済分野を中心に前例のない大規模な変革が進行しており、地域的な課題や国際的な危機にもかかわらず、マクロ経済の安定性と経済的強靱性を維持している。このことは、エジプトが想定以上のレジリエンスを有していることを示している。



世界各地で地政学的緊張が高まる中、サプライチェーンや投資先の多様化は不可欠になっている今日、エジプトは新興市場へのアクセス拠点として、また多様化戦略の一環として、日本企業に対する現実的な解決策を提供する立場にあるといえる。

2011年から4年間、日本で大使館次席を務めた。日本の投資家が重視するのは積極的かつ特別な優遇策であることを承知している。日本からの投資は高い技術力を伴い、かつ長期的なコミットメントを持って行われることから、エジプトは大統領主導で日本投資を最優先し、専用窓口やスエズ運河経済特区の工業団地整備など具体策を進めている。日本の投資家の判断には日本をどれほど重視しているかを実感できることが重要であるが、日エジプト間には大エジプト博物館をはじめ多くの象徴的かつ示唆的な協力事例が存在している。また、教育分野では日本式教育を導入した学校が500校あり、高等教育のみならず幼児教育の分野でも日本への信頼と親近感を次世代にも広

げている。私は、昨年9月の着任以降、既に120社の日本企業と個別の面談を重ねてきた。エジプトは単なる収益機会を提供する投資先にとどまらず、第三国市場へのアクセス拠点であり、諸課題に対するソリューションを提供し得る国である。さらに、サプライチェーンの分散、投資先の再検討、新たな市場への展開が求められる中、エジプトはこれら3つの課題に対する解決策を提示し得る国であると確信している。

また、スタートアップの参入や医療分野での協力可能性については、フリーゾーンや産業団地など多様な投資形態を用意しており、各企業の事業モデルに応じた柔軟な対応が可能である。また、既に進出している日系企業から直接学ぶことも重要であると考えている。エジプトは中東において安定した安全な拠点であり、地域紛争の仲介にも関与している。日本企業には欧州などを経由するのではなく、エジプトを拠点として直接展開することの有効性を強調したい。

デ・パラシオ駐日スペイン大使と夕食会



FECは4月8日、イニゴ・デ・パラシオ・エスパーニャ駐日スペイン大使を迎え、意見交換を兼ねた夕食会を開催した。写真。スペイン側からは大使のほか、ゴメス・デ・アラランダ公使参事官、中尾憲枝大使秘書が出席し、FEC側からは松澤建理事長をはじめ、会員ら計7人が参加した。

冒頭、松澤理事長は、スペインが信仰、文化、経済など多様な分野において世界の中心的役割を担ってきたことに言及し、その象徴としてサグラダ・ファミリアを紹介した。同建築は建築家アントニ・ガウディの設計によるもので、現在も建設が続く未完の世界遺産であり、長い年月をかけて完成を目指すその姿は、人

類の知性と行動の結晶として高く評価されるべきものであると述べた。

これに対しデ・パラシオ大使は、松澤理事長への謝意を表するとともに、先般大使館で開催されたビジネスフォーラムにおいて参加者のスペインに対する高い関心と愛情を感じたと述べた。

また、FECが短期間で多くの参加者を集め大規模なフォーラムを開催したことを高く評価し、参加者の多くが企業の幹部であった点にも感銘を受けたと語った。さらに、本夕食会の参加者もスペインに関心を有する企業関係者であることに光栄の意を示し、本日の意見交換を通じて親交を深めることへの期待を述べた。その上で、現在の国際情勢を踏まえ、日本とス



インがどのような協力関係を構築し得るかについて意見交換を行いたい旨を述べ、懇談は終始和やかな雰囲気の中で活発に行われた。

■ 駐日ギリシャ大使

観光、交流拡大へ直行便再開を



▷4月3日=オルガ・クリアマキ駐日ギリシャ大使

小方俊也FEC専務理事はオルガ・クリアマキ駐日ギリシャ大使を訪問した。大使は国立トラキア大学で法学士号、国立パンテオン大学で国際公法および欧州法の修士号を取得後、1998年に外務省に入省。アジア・オセアニア局や欧州評議会代表部、在グルジア、スイス、フランスの在外公館勤務などを経て、文化・教育・スポーツ局長など要職を歴任した。2025年12月に着任し、現在に至る。

【大使コメント】

私は外交官としての初期にギリシャ外務省アジア局に勤務し、日本訪問の機会を得ながらも妊娠により実現できなかった。その後も日本への関心と訪問への思いを持ち続け、今回初めて大使として赴任できたことを大きな喜びとして受け止めている。来日前から日本語学習にも取り組み、現在も継続している。

実際に来日して以来、日本の美しさと独自性に強い感銘を受け、その印象は日々深まっている。東京のみならず京都や大阪など各地を訪れ、日本文化への理解を深めている。人々の礼儀正しさや思いやり、他者への敬意の精神は特に印象的であり、これはギリシャの価値観とも共通する。両国は地理的には離れているが、民主主義と豊かな文化を共有し、人類文明に大きく貢献してきた点で非常に近い存在である。美術館や文化施設の充実、建築に見られる歴史的様式の豊かさにも強い関心を抱いている。

ギリシャと日本は125年以上にわたる外交関係を有し、2024年には文化・観光年が祝われた。さらに首脳往来を契機と

して、海運、文化、エネルギー、観光、教育、防衛など、両国の関係は幅広い分野で戦略的パートナーシップに格上げされた。26年のテサロニキ国際見本市における日本の名誉招待国参加は象徴的な機会であり、多くの日本企業が参加し、経済と文化を結びつける交流の場となる。エネルギー分野ではギリシャが地域のハブとして重要性を高めており、技術やスタートアップ分野も含め協力の可能性は大きい。防衛やイノベーションにおいてもさらなる発展が期待される。

今後の重要な目標の一つは、両国を結ぶ直行便の再開であり、観光と人的交流の拡大に不可欠である。ギリシャは自然の美しさと豊かな歴史に加え、文化観光、宗教観光、海洋観光、医療観光、ワインやオリーブを楽しむ食文化など多様な魅力を持つ。「フィロクセニア」と呼ばれる温かなもてなしの精神も大きな特徴である。日本の人々にはぜひギリシャを訪れ、その価値を直接体験してほしい。

外交官として自国の文化と立場を伝えることは大きな責務であり、ギリシャはEUおよびNATOの加盟国として、また国連安全保障理事会の非常任理事国として国際法とルールに基づく秩序を重視し、地域と世界の安定に貢献している。今後も日本と連携しながら、両国関係のさらなる発展と相互理解の深化に尽力していく考えである。

外交官として自国の文化と立場を伝えることは大きな責務であり、ギリシャはEUおよびNATOの加盟国として、また国連安全保障理事会の非常任理事国として国際法とルールに基づく秩序を重視し、地域と世界の安定に貢献している。今後も日本と連携しながら、両国関係のさらなる発展と相互理解の深化に尽力していく考えである。



Courtesy Call

■ 駐日カンボジア王国大使

友好の絆 次世代に継承へ



▷4月10日=チュム・スンリー駐日カンボジア王国大使

小方専務理事はチュム・スンリー駐日カンボジア王国大使を訪問した。大使は王立法経済大学で公共法の学士号を取得後、外務・国際協力省において報道、人事、情報分野などで経験を積み、在ブルガリア、米国などの在外公館勤務や米州局副局長および情報局長を歴任した。駐ロシア大使、駐オーストラリア兼ニュージーランド大使、駐米国大使や国務次官を務めるなど豊富な外交経験を有する。2025年11月に着任し、現在に至る。

【大使コメント】

私は、日本を伝統と革新を高い次元で調和させてきた国として深く敬愛している。長い歴史の中で培われた文化や価値観を大切に守りながら、科学技術、産業、教育などの分野で世界を先導してきた姿に強い尊敬の念を抱いている。日本人は規律、誠実さ、責任感を重んじ、相手への思いやりと社会の調和を大切にす国民である。その姿勢は「おもてなし」にも表れており、日本社会の特筆すべき価値であると感じている。カンボジアと日本の関係は、長年にわたり相互信頼と友情に支えられて発展してきた。両国関係が包括的戦略的パートナーシップへと格上げされたことは、その強固な結び付きと将来への期待を示すものである。日本は、我が国の平和構築と発展において極めて重要な役割を果たしてきた。つばさ橋や国道5号線の改修、シアヌークビル港湾整備への支援は、人々の暮らしと経済活動を支える重要な基盤であると同時に、両国の友好と協力の象徴でもある。

また、人材育成や文化交流の分野でも、日本の協力は大きな実りをもたらしてきた。

私は駐日大使として、投資、教育、文化、若者交流など幅広い分野で両国関係をさらに深めたいと考えている。製造業、農業、観光、新興産業においてカンボジアの可能性を積極的に伝え、日本企業にとって魅力ある協力相手であることを広く発信したい。

また、政府、企業、市民社会の各層との対話を重ね、相互理解と信頼を一層深めたい。今後はデジタルトランスフォーメーション、グリーン開発、高度人材育成といった新たな分野でも協力を広げ、両国の強みを生かした実践的な連携を進めていきたい。

日本の皆様には、これまでの温かい友情と支援に心から感謝したい。日本は開発の協力相手であるだけでなく、カンボジア国民にとって信頼できる真の友人である。この友好の絆を次の世代へ確かに引き継いでいきたいと強く願っている。カンボジアは豊かな文化遺産と若い活力を併せ持つ国であり、アンコール・ワットに象徴される歴史の誇りと、未来に向かう力強い成長の可能性を備えている。国民は温かく、困難に立ち向かう強さと前向きな精神を持っている。観光地としてだけでなく、将来に向けて共に歩むべき重要なパートナーとして理解を深めていただきたいと願っている。



Hotel & Resort
SHIMODA BAY
KUROSHIO
下田ベイリゾート

ご予約：0558-27-2111 <http://www.baykuro.co.jp> 静岡県下田市柿崎 4-1

地球はつづく、
化学でつなぐ!

東亜合成

会員紹介 株式会社新開トランスポートシステムズ

「技術」で社会支え、世界つなぐ精密機器物流

株式会社新開トランスポートシステムズは、1909年（明治42年）の創業以来、通信および社会インフラ分野を中心とした精密機器物流に注力し、産業の発展や経済の成長に貢献してきました。

当社は、輸送・保管・梱包といった従来の物流機能にとどまらず、倉庫内での製造請負やキitting、包装設計、搬入時の通信工事サポート、さらには特殊環境への搬入据付や回収に至るまで、物流に関連する工程をワンストップで提供しています。

これにより、サプライチェーン全体にわたって高付加価値を生み出し、お客様の多様なニーズに柔軟に応える体制を整えています。

当社の最大の強みは「技術」にあります。次世代通信、社会インフラ、ヘルスケア、デジタルインフラ、ファクトリーオートメーションなどの重点分野においては、高度な精度と信頼性が求められるため、輸送から設置までを一貫して担う体制を整えております。その土台となるのが「人による技術」です。精密機器の取り扱いや据付には、単なる機械化では代替できない高度な判断力と熟練の技能が不可欠です。現場で培われたノウハウと技術者一人ひとりの専門性こそが、競争力の源泉であると考えています。

また、「物流システムのデジタル化」にも積極的に取り組んでいます。物流管



理・在庫管理・輸送及び配送の最適化を図り、業務プロセスの効率化を推進しています。

全国約70拠点に広がる物流ネットワークと、現場に即した最適な物流マネジメントシステムを基盤にして、「人による技術とデジタル技術」を組み合わせ、顧客の課題に応じた最適なソリューションを提供しています。

さらに、海外展開にも注力しています。タイ・ベトナムの現地法人では、技術保有者が現地スタッフの指導・教育を行うことで、国内と同等の高い物流品質を維持しています。国内で培った梱包・搬出入のノウハウとフォワーディング機能を活かし、精密機器分野においては、国内の搬出・輸出梱包から国際輸送、海外での搬入据付まで一貫対応しています。国際フォワーダーとの連携により、グローバルサプライチェーンを支えています。

また、1983年より国際交流の一環として、米国ミシガン州立大学との親交を深めています。日本における包装の変遷や現状を紹介するなど、梱包・包装分野の情報交換を定期的に行っています。

このような取り組みによって、当社は



代表取締役会長
古賀あや



代表取締役社長
社長執行役員
北浦剛

<会員概要>

法人名：株式会社新開トランスポートシステムズ

代表者：代表取締役会長 古賀あや

代表取締役社長 北浦剛

所在地：東京都江東区東陽3-7-13

TEL：03-5653-9335

URL：https://www.stsnet.jp



クレーンによる荷降ろし作業



空炉関連設備の開梱搬入作業



営業所(国内約70拠点)

国と国をつなぎ各国の産業を支えるとともに、海外教育機関との連携による人材育成や技術交流を推進し、民間レベルでの国際理解と友好の促進に関わることを



輸出用建設資材のバンニング作業

大切にしています。私たちは今後も、安全で高付加価値な物流サービスを通じて、国際社会の持続的発展に貢献してまいります。

会員紹介 中川優志

労働力不足の窮地をチャンスに変える

新たにFEC（民間外交推進協会）へ入会いたしました中川優志と申します。宮崎県都城市出身。高校卒業後に国のために働きたいと思い航空自衛隊へ入隊しましたが、骨折により除隊処分となり心機一転、慶應義塾大学へ進学し、新卒でグーグルという外資系IT企業に入社しました。そこで初めてテクノロジーの影響力を目の当たりにし、テクノロジーを使って日本に大きな価値を創造するような仕事をしたいと思い、スタートアップ企業を創業しました。

■建設業 x AI-BPOで世界をつなぐ

現在、建設楽楽カンパニーという会社を創業し、建設業界の事務作業をAIで再設計するサービスを提供しています。具体的には、業務をアウトソーシング（代行）しながらAIによる自動化を進めるAI-BPOという新しいビジネスモデルを採用し、主に下請け企業の事務作業の業務構造そのものを再設計・標準化しています。人材不足という問題を、人を増やして解決するのではなく構造を変えることで解決するアプローチをとっています。

建設業界は人々が生活をする上で必要不可欠です。日本国内の建設投資額は約70兆円、建設業就業者は約470万人にのぼる巨大市場ですが、人材不足度は全業界でワースト2位、つまり他の業界に人

建設楽楽カンパニー

材が流出しています。すでに80%以上の建設会社が正社員不足に直面しており、今後も長期的に深刻化が避けられない状況です。

一方で山地が多く四季がありながら天災の多い日本の土木・建築技術は世界的に評価されており、東南アジアや米国へ進出する企業が少しずつ増加しています。私たちは、深刻な人材不足により構造改革の機運が高まっている今だからこそ、グローバル・スタンダードな業務設計へとシフトするチャンスであると捉えています。

AIやスタートアップ企業という、市場を破壊し勝ち組と負け組を作る、というイメージがあります。しかし日本という小さな国で、さらには人口減少する局面において分断を生み出すやり方は持続可能ではないと考えています。私たちは共存共栄の精神で、様々な立場の人々にとってメリットが生まれるような事業成長を描くことが重要だと考えています。

■FECとのご縁

グーグル時代の先輩のご紹介でFECの会へ参加させて頂き入会するに至りました。私自身、日本と諸外国との接点と



中川優志

<会員概要>

法人名：株式会社建設楽楽カンパニー

代表名：中川優志

所在地：東京都千代田区二番町9-3

THE BASE 麹町 W201号

TEL：03-5050-4291

URL：https://kensetsu-rakuraku.co.jp/



THE-BASE麹町外観

という点に昔から興味があり、海外の友人が多くいたり、フィリピン、ベトナム、米国での勤務経験があります。現在行っている事業についても、日本国内にとどまらず、建設業界の海外展開を推進するハブとして世界各国での建設業務の標準化を担う会社となり、また一方で海外出身の人材が日本の建設業界で働く機会を創造できる会社になりたいと考えています。

FECを通じて国際的なネットワークや知見を取り入れながら、共存共栄の形



東京イノベーションベースで開催された、東京都千代田区商工観光課主催「千代田CULTURE × TECH ビジネスコンテスト2026」にて登壇する代表の中川優志
—2026年2月13日

で日本の建設業の生産性向上と国際競争力の強化を実現します。当会での活動を通して皆様に新たなご縁や機会が生まれるよう貢献できたらと思います。

7月にFECモンゴル訪問団を派遣 参加者募集中



民間外交推進協会（FEC）では、第6次FECモンゴル訪問団（団長：福田泰久日FECモンゴル文化経済委員会委員長・センコーグループホールディングス㈱代表取締役社長）として、2026年7月7日（火）から12日（日）まで、モンゴルのウランバートルを訪問する予定である。

近年のモンゴル経済は、資源価格の回復を背景に安定的な成長軌道を取り戻しつつあり、財政健全化の進展や金融改革の継続により、マクロ経済は総じて堅調に推移している。特に鉱業分野を中核として、インフラ整備、エネルギー、物流、さらにはデジタル分野への投資が加速しており、日本企業にとっても中長期的な事業機会が拡大している状況にある。

本訪問団においては、モンゴル政府要人および経済関係機関との面会・意見交換をはじめ、現地有力企業との交流の機会を設けることで、参加各社のビジネス展開の可能性を多角的に探るとともに、同国の最新の投資環境や政策動向に対する理解を一層深



モンナラン太陽光発電所視察

めることを目的とするものである。

また、ウランバートル市内に所在するダンバダルジャー日本人慰霊碑を訪問し、両国関係の歴史的経緯に触れる機会を設ける。加えて、滞在期間中にはモンゴル最大の国民的祭典であるナーダム祭の視察を予定している。

ナーダム祭は、毎年7月に開催されるモンゴルを代表する伝統行事であり、国家的祝祭として国内外から多くの観客を集めるものである。同祭は、単なるスポーツ競技の枠を超え、民族衣装や伝統音楽、儀礼的要素を含む総合的な文化行事としての性格を有しており、モンゴル人の価値観や精神文化を理解



D. ツォグトバートル外務大臣（前列右）と記念撮影 ーいずれも2018年、モンゴル

する上で極めて重要な機会である。実際、昨年には天皇皇后両陛下がモンゴルをご訪問された際にナーダム祭をご観覧になり、同国の伝統文化に触れたことは記憶に新しいところである。

本訪問団においても、こうしたナーダム祭の観覧を通じて、モンゴルの歴史・文化への理解を深めるとともに、両国間の相互理解の促進に資することが期待される。

FEC 活動日誌

今後の催しのご案内

- ◆ 5月12日（火）15時～17時
第307回国際研究会
（バン格拉デシュ・ビジネスフォーラム）
内 容：ムハンマド・ダウド・アリ駐日大使の講演、ほか
会 場：バン格拉デシュ大使館
- ◆ 5月15日（金）17時30分～20時
日本文化紹介（相撲イベント）
対 象：大使及び大使館職員とその家族
内 容：相撲の学びと体験、ちゃんこ料理の堪能
会 場：横綱とんかつ どすこい田中
- ◆ 5月20日（水）14時～16時
第127回ロシア研究会
講 師：池田嘉郎東京大学大学院人文社

- 会系研究科西洋史学研究室教授
テーマ：プーチン体制の歴史的文脈
会 場：オンライン
- ◆ 5月29日（金）16時～18時
第22次アセアン訪問団報告会・解団式
内 容：3月実施のアセアン訪問団（シンガポールとフィリピン）の詳細
会 場：如水会館
 - ◆ 6月3日（水）14時～16時
第16回中央アジア・コーカサス研究会
（ウズベキスタン・ビジネスフォーラム）
内 容：ムクシンクジャ・アブドゥラフモノフ駐日大使の講演ほか
会 場：ウズベキスタン大使館
 - ◆ 6月11日（木）15時～17時
第118回中国研究会
講 師：柯隆東京財団首席研究員
テーマ：対中ビジネスのリスクとチャンス
会 場：オンライン

海外訪問団のご案内

第6次FECモンゴル訪問団
期 間：7月7日（火）～12日（日）
訪問都市：ウランバートル

詳細、最新情報は本協会ホームページ（<https://www.fec-ais.com>）をご覧ください。事務局（電話03-3433-1122）にお問い合わせ下さい。いずれも定員に達し次第締め切りとさせていただきますので予めご了承下さい。

2026年度 民間外交推進協会及び一般社団法人民間外交推進協会

定時総会・通常理事会のお知らせ

民間外交推進協会及び一般社団法人民間外交推進協会の定時総会・通常理事会を以下の通り開催する予定です。

一般社団法人民間外交推進協会の定時総会・理事会にて、正式に一般社団法人民間外交推進協会として発足いたします。

- ・日時：6月19日（金） 16時30分～17時30分（予定）
- ・内容：民間外交推進協会 定時総会・通常理事会
一般社団法人民間外交推進協会 定時総会・通常理事会
- ・場所：帝国ホテル本館4階「桜の間」

- ※1 詳細につきましては正会員ならびに役員の方に後日、書面にてご案内します。
- ※2 今年度の会員懇親会は11月12日（木）に開催予定です。

協会だより

【新名誉会員】



チュム・スンリー氏
（カンボジア王国大使）
王立法経済大学にて公共法学士号取得。1980年外務・国際

協力省入省後、報道、人事、情報分野などで経験を積み、在ブルガリア、米国などの在外公館勤務や米州局副局長および情報局長を歴任。2003年駐ロシア大使（04年からバルト三国の大使を兼任）、駐オーストラリア兼ニュージーランド大使、駐米国大使等を経て21年国務次官。25年より駐日大使。

東京

センコーグループ

TOKYO EAST SIDE HOTEL KAIE

東京イーストサイド ホテル権会 TEL.03-3699-1403
東京都江東区潮見2-8-11 <https://www.hotelkaie.jp>

潮見

豊洲

JR 京葉線潮見駅 東口前

舞浜

東京駅から7分。舞浜へは9分。
観光地へのアクセス便利な好立地！



100年の歴史を 紡ぐカクテル

1924年に誕生した帝国ホテル初のオリジナルカクテル「マウント フジ」をご堪能ください。



帝国ホテル